

「2023ワーキング・スタディー・ツアー」に参加して

連合本部 森 啓 記

3年ぶりに再開されたワーキング・スタディー・ツアー（WST）に、私自身は2019年以来4年ぶり2度目の参加となりました。前回同様、様々な業種・組織から参加の素晴らしいメンバーとともにCSAの活動が支援先で高い評価を受けていることを再確認でき、また今後の活動に向けて、昼夜問わず語り合うことができたことに、先ずは感謝申し上げます。

CSAの常任理事を仰せつかる身として、今回のWST参加は、コロナ禍を経た中で支援国ラオス・タイの現状を肌で感じ、継続事業の課題抽出や今後の支援の在り方に対する様々なヒントを得ることができた有意義なツアーとなりました。

私は、前回参加時の感想文で「帰国後、日が増すにつれ率直に思うことは、ラオスのあの子供たちの輝く瞳、笑顔にまた会いたい、サンティパーブ高校生寮の生徒や卒寮生ともっともっと夢や将来について語り合いたい。」と記しました。ラオスの首都ビエンチャンで今回も開催されたサンティパーブ高校生寮卒業生との交流会において、前回高校生寮訪問時に一緒に写真に収まった当時2年生だった学生と再会でき、卒業後国立ラオス大学に進学し、現在は中国に留学して将来外務省に勤めたいと熱く夢を語ってくれました。そして、参加卒寮生一人ひとりが、大学で明確な目標に向かって純粋に勉強に励んでいることや社会人として重要な役割を担っていることなどを話してくれる自己紹介とともに「私たちの今があるのはCSAの支援のおかげです。」という言葉や感謝の思いを、私たちに一生懸命伝えようとする姿に胸が熱くなりました。

また、ナラオ村小学校訪問時に交流した子供たちが、紙飛行機を少しでも遠くに飛ばすために真剣に取り組むキラキラした眼差しや笑顔、サンティパーブ高校生寮で昼食時間も惜しんで真剣に勉強している真面目な姿など、4年前と何ら変わることなく、CSAの支援がラオスの将来に確実に貢献していることを改めて実感し、私の4年越しの夢もかない大変嬉しく思いました。

4年ぶりに訪れたラオスでは、中国の一带一路政策により初の高速道路が整備され、中国ラオス鉄道（新幹線）が開通するなど、都市部においては、交通インフラ整備が進んでいました。

前回WST参加時は、全国の多くの組合員が参画し、長らくCSAの中心事業の一つであった「救援衣類を送る運動」が最終的に支援先であるラオス・タイにおいて、どのように取り扱われ現地の方々に届けられているのかを実際に視察することができ、継続した取り組みの意義を現地支援先の皆さんの感謝の声で実感できたことを改めて思い起しました。

コロナ禍や現在の経済状況を受け、活動の重点を「救援物資事業」「小学校建設・補修事業」「教育支援事業」としていくCSAにおいて、今回のWSTでは、これまでの在ラオス・タイ日本国大使館公式訪問だけでなく、プット・シンマラヴォンラオス教育スポーツ大臣やルアンパバン県教育・スポーツ局長、サンティパーブ高校校長はじめ教職員幹部との面談や現地で活動する「難民をたすける会（AAR JAPAN）ラオス事務所」「国際労働財団（JILAF）バンコク事務所」の駐在者と意見交換を行った



ことにより課題の一端を再認識することができました。

ラオスの教育事情全般においては、教員の絶対数や資質不足、地方部と都市部の格差、民族間の言葉の壁、教育分野における国家予算不足等々、残念ながら4年前に説明を受けた状況と変化が見られないと正直感じました。また、小学校建設・補修やサンティパーブ高校寮生支援については、ラオスの現地通貨（キープ）の相場が対米ドルや対バーツで大幅に下落していることを受け、ラオスで販売されている商品の多くが、隣国タイなどから輸入されていることから、資材や生活費が高騰しているためCSAに対して更なる支援の声が出されました。

一方、日本で支援を続ける仲間のためにも、CSAに寄せられた善意が適切に管理・運用され、今後も継続した活動が行えるよう支援先のリーダーの更なる協力も必要であると強く感じました。現地から多くの要請があることは十分理解する一方、諸先輩方、諸団体の皆さまによって支えられてきた40年を超えるCSAの運動をこれからも継続していくために、皆さんとこれらの課題について共有し、率直な意見交換のもと、できることを確実に実行していくことが重要であると考えています。

連合運動に携わるものとして、連合「愛のカンパ」助成団体であるCSAのWSTを通じて、連合に集う働く仲間の善意が現地で有効に活用されていることを今回も確認できたことは有り難く、CSAの活動を少しでも多くの人たちに周知し支援を広げる働きかけをしていきたいと思えます。

最後に、現地で真摯にご対応いただいた全ての皆さま、CSA鈴木副会長（団長）・山崎事務局長はじめ参加メンバー皆さんのおかげで、無事に全行程を終えることができ、本当に貴重な時間をご一緒できましたことに感謝申し上げます。

ありがとうございました。

UAゼンセン 末 晶 利

今回ワーキング・スタディー・ツアーに参加させていただき、人生初のラオス・タイで大変貴重な経験をさせていただいたことに対し、CSA事務局の皆様はじめとする関係者の皆様、そしてこのような機会を与えてくださった全ての皆様に感謝いたします。

CSAの活動については、一番身近な活動である中古衣類のカンパ活動が、様々な要因によって現在できない状況となっています。その他のCSAの活動については、紙面上で知る機会はあるものの、自分自身あまり理解が出来ていませんでした。今回、実際に現地に行き直接自分の目で見て現地の方々の声を聞くことによって、大変重要な活動であり、現地の方々にとって本当に必要な活動をしているということを知る機会となりました。

今回のツアーにおいて、ラオスおよびタイの在日本国大使館への訪問、ラオスの教育スポーツ省等への公式訪問は大変貴重な経験となりました。また、AARやJILAFへの訪問は、実際に現地で活動している担当者から話を聞くことができ、全く現地の状況を知らない私にとっては、ラオス・タイの今の状況や課題を知り、そして支援の必要性を感じる機会となりました。

そして特に印象に残ったことは、ナラオ村の小学校訪問およびサンティパーブ高校生寮の訪問および卒業生との交流でした。

ナラオ村の小学校は、現在25校目の小学校建設を行っている学校です。小学校訪問では子供たちとの交流の機会があり、内容はメンバーが2人1組となり、教室にて小学生に紙飛行機作りを

教えるというものでした。綺麗な色の折り紙を見る子供たちは目がキラキラと輝き、一生懸命に折り紙を折り、紙飛行機作りを楽しんでいました。出来上がった紙飛行機を校庭で飛ばす子供たちは皆笑顔で本当にうれしそうでした。今回はこの1校だけの訪問でしたが、CSAの支援により子供たちが安心して勉強ができ、そして遊べる環境となっていることを実感すると同時に、学校建設と環境を維持するための補修支援の両方の必要性を実感する機会となりました。

サンティパープ高校生寮卒業生との交流は、片言の英語と翻訳アプリを駆使してコミュニケーションをとりました。卒業生たちは、政府機関での勤務や医師、学校の先生等、現在ラオス国内で重要な仕事をしています。卒業生たちは皆CSAへの感謝を口にしていました。そしてこれからも支援を続けて欲しいとの声が多く聞かれました。CSAの支援が将来のラオスを担う人材の育成に繋がっているということを実感できる時間でした。そして数日後、CSAが全面的に支援を行っているサンティパープ高校生寮を訪問。到着すると、寮生および先生たちから熱烈な歓迎を受け、寮生たちが今勉強できるのはCSAの支援があってこそとの感謝の言葉をいただきました。寮生たちは4人部屋で生活しており、部屋を見せてもらうと決して広いとは言えない部屋の中には勉強本が積み上がり、日々一生懸命勉強している様子でした。地方出身で高校に通うことができないはずであった寮生たちは、CSAの支援により高校に通い頑張る勉強し、ラオス国内で優秀な成績を上げ、将来の夢に向かって頑張っています。近い未来、夢叶え、是非将来のラオスを担う人材になって欲しいと思います。



今回、貴重な経験をさせていただいた1人として、CSAの活動の輪が更に広がるよう、一人でも多くの方にこの活動の意義を伝えていきたいと思います。

最後に、鈴木団長、森副団長、山崎事務局長をはじめ、素晴らしいメンバーとこの貴重な経験ができたことに感謝しています。本当にありがとうございました。

UAゼンセン 雪丸 貴宏

CSAワーキング・スタディー・ツアーへの参加が決まったのは2022年11月のこと。

当時は、CSAの活動といえば中古衣料カンパのイメージしかなく、ラオスがどこにあるのかもあやふやな状態、おまけにアジア料理も得意ではなかったのが、期待と不安半々というのが正直な気持ちでした。

視察を終えた今の気持ちですが…今回の視察のチャンスをくれた上司、組織に感謝の気持ちでいっぱいです！自分の人生の財産となる貴重な経験でした。

本日は特に印象に残った二つのエピソードを紹介させていただきます。

一つ目はCSAが支援するサンティパープ高校の卒業生たちとの交流会の時のことです。卒業生たちは一生懸命勉強して大学を卒業し、その後ラオス国内有数の企業や国家公務員として働くなど、まさに国を背負う立場で活躍しているそうです。そんな彼・彼女らは、学業優秀にもか

かわらず、CSAの支援がなければ貧しい家庭環境のため高校に進学できなかったかもしれない境遇だったとのこと。ですから、「高校で金銭面の心配なく勉強できたこと、そして自分たちが今こうして生活できていることはCSAの支援のおかげである」と、皆さん涙ながらに感謝の言葉を私たち視察団に伝えてくれました。CSAの活動がラオスの教育に貢献していること、ひたむきな学生の人生を支えていることを肌で感じる場面でした。

二つ目は、CSAが25校目として建設している小学校を訪れた際のことです。子供たちの服装から生活の厳しさを感じましたが、子供たちの様子からは学校生活をとても楽しんでいるように感じました。一方で、ラオス全土を見渡すと、まだまだ住居の近くに小学校や中学校がなく、通学が困難で学業をリタイアする子供たちがいるとの話をラオス教育省の方から聞きました。CSAが継続して小学校を建設する意義をあらためて感じる場面でした。

財政が厳しいラオスでは教育分野へ予算配分が十分になされていない実態があることを知り実際に各地でそのことを実感してきました。CSAがラオスで今後も継続してラオス支援を行っていきけるよう、自分も視察団の一員として、産別や単組のさまざまな場面で発信していきたいと思います。



カネボウ労働組合 小武方 陽子

まず初めにCSA事務局と関係者の皆様、そしてUAゼンセン並びに組合員の皆様方に心から深く感謝申し上げます。今回このツアーに参加させて頂きCSAの活動内容をよく知り現地の実態や状況を知ることができ非常に貴重な経験をさせて頂きました。

3年ぶりのツアーとの事でコロナ前の状況とは現地の人々の暮らしにも大きく変化があった様子でした。ラオスは開発途上国より更に低い状態の国(LDC)ではあるもののふれあった子供達や町の人々からは苦しみや困難な状況を感じさせず笑顔で明るく目を合わせれば『サバイディー』と手を合わせて挨拶してくれる、その瞬間一気に親しみさえも感じ私自身心の開示が始まるようでした。

CSAの活動は『救援物資事業・小学校建設補修事業・教育支援事業』を中心に活動している事を今回のツアーで改めて教育省や学校関係者からの感謝のお言葉や盛大な歓迎をしてくれた事でいかにこの支援を必要とされているのか私達日本がどれだけ期待されているのかということを再認識する機会にもなりました。

特に印象に残ったのは現在建設途中の25番目の『ナラオ村小学校』の訪問です。私達が行くと子供達が揃って笑顔で「サバイディー」と近寄り手を振ってくれました。私たちはそのまま校長室に招かれヤシの実ジュースで歓迎頂き、CSAの活動の内容と前日に伺ったラオス教育省大臣のお話をお伝えし校長先生からも学校の現状としてまだ支援が足りない状況、コロナ禍において教える側の人員確保、教育の質が低下している等のお話を頂き最後には今後も変わらずご支援頂きたい旨とこれまでのCSAの活動に対して感謝のお言葉を頂戴し新校舎見学を始めました。その後各クラス2名ずつ分かれ一人3枚ほどの折り紙を配り、紙飛行機をレクチャーしました。今

でもカラフルな折り紙を手にした瞬間の子供達のキラキラした瞳が目に焼き付いています、懸命に見て聞いて隣の子と見比べ、できない子がいたら私に合図を送り教えてと夢中で取り組む姿に目頭が熱くなりました。そして校庭で掛け声と共に一斉に飛ばし喜びを分かち合いもっと遠くに飛ばそうと何度も果敢に挑戦していました。その後は先生方から地元食材を使った昼食の振舞いをいただき最後はみんなで写真を撮って名残惜しい気持ちでいっぱいでしたが学校を後にしました。

2030年までに持続可能な社会に向けて世界に課せられたSDGsの目標、私はこのツアーを経験し17の項目のあらゆる課題を目の当たりにしました。貧困・教育・安全な水・経済・平和どれをとっても膨大な課題があると感じましたが日本に帰ってきて自分が出来る事は何か？出来る事から少しずつ取り組みたいそう素直な気持ちにさせてくれたのはCSA関係者の皆様、ツアーに参加された方々そして現地の人々から頂いた思いやりのある民族性のおかげとそう感じました。



JAM タダノ労働組合 中原 大海

はじめに、今回のスタディツアーに参加させていただき、貴重な経験をすることができました。CSA事務局の方々をはじめ、関係者の皆様には厚く御礼を申し上げます。

弊労働組合ではコロナ禍前に救援衣料の活動を行っていましたが、正直なところ、私自身がCSAの活動詳細やその成果については理解できていない状況でした。特にラオスにおける教育面での支援はこのツアーに参加することになってから知ったというありさまで、このツアーで現地へ赴いて理解を深めることができれば、と考えていました。

ラオス訪問二日目の夕方、CSAが寮運営を支援しているサンティパーブ校の卒業生たちとの懇親会がありました。私はスマホの翻訳アプリ+片言英語でのやり取りでしたが、なんとか『CSAの寮運営支援活動についてどう感じているか』を質問したところ、“あの寮での生活がなければ、今の自分はいない”という趣旨の回答が返ってきました。ツアー全体を通じて知ったことですが、ラオスにおいては寮がない高校が多く、ない場合は遠い学校に通う必要があります（また寮があったとしても高い寮費を払う必要があります）、特に地方の貧困層の子どもたちが勉学に励むには高いハードルがあるとのことでした。また、別の卒業生は“地方の高校では都市部のような（質の高い）授業を受けられない”とも言っていました。卒業生の彼・彼女らは地方の学校で一二を争う優秀な成績を収めるレベルの子どもたちだったのですが、この寮がなければ満足いく教育が得られず、現在とは全く違う道を進んでいた可能性が高いわけで、寮支援活動がいかに重要であるかを認識させられました。



ラオス訪問五日目には、実際にサンティパーブ高校の寮を訪問し、寮や寮生の実状を確認してきました。その際、教員から現状の報告を受け、勉強や部活動面で優秀な成績を残している子が多くいるとのことでした。寮の部屋を見学しましたが、一部屋に何人かが詰め込まれる決して広いとは言えない部屋の勉強机に、山

のように置かれた教科書やノートが印象的で、熱意をもって学生生活を送っていることが実感できました。

上記のようにCSAの教育支援活動の成果をよく確認できた傍ら、現在のラオスの教育体制が抱える問題や課題への理解も深めることができました。印象的だったのは、在ラオス日本大使館にて書記官より説明を受けたもので、特に地方部での『教員数の不足：地方部勤務を嫌う』、『教員スキルの不足：養成校後のアップデート機会が非常に少ない』、『民族言語の壁：少数民族の子どもへの教育・フォロー』の三点で、『子どもたちが勉強する機会や場所』の提供面での支援の他にも支援の形があるのでは、と考えさせられました。また、公務員として働いている卒業生との交流や寮視察後に訪問したルアンパバン県の教育スポーツ局での会談でも話に挙がっていたのが、教師を含めた公務員の待遇（特に給料）が良くない点で、こちら側からアプローチしづらい問題ではあるのですが、こちらも深刻な問題だと感じました。

全体を通じて、CSAの活動と成果、そしてラオスの実情と問題点への理解を深めることができたツアーとなりました。この内容をJAM組織および各単組に共有し、活動の輪を少しずつ広げていく一助になればと思います。

I H I 労働組合連合会 武蔵支部 藁科将彰

まず初めに、今回のワーキング・スタディ・ツアーに参加させていただき、非常に貴重な体験をさせていただいたこと、すべての関係者の皆様に感謝申し上げます。

CSAの活動は「中古衣類を送る活動」しか理解していなかったが、今回のツアーに参加させていただいたことでラオスにおける小学校建設・補修事業や高校生への教育支援事業が現地で行われている必要とされていることであるか理解することができた。

ツアーの中で特に印象的だったことの一つ目はナラオ村小学校での小学生との交流です。言葉も通じない日本から来たメンバーに対して満面の笑顔で出迎えてくれました。どの子ども達も邪気のない笑顔、まさに無邪気な笑顔でした。校長先生との意見交換や建設中の校舎の視察後、各教室にメンバーが分かれて小学生と一緒に紙飛行機を折りました。言葉が通じませんが表情や身振り手振りで一緒に紙飛行機を折った後、校庭で一斉に紙飛行機を飛ばしました。ラオスでは小中学校は義務教育だが学校が足りないためそもそも小学校に行けない子どもや、家業の手伝いのため途中でドロップアウトをしてしまう子どもが少なからずいる現状を知りました。教育は未来の国力の土台でもあるためCSAの支援事業が未来のラオスのために非常に重要な活動であることを実感しました。

二つ目はCSAが支援しているサンティパー高校生寮の卒業生との交流です。サンティパー高校生寮の支援は現在入寮しているのが17期生であり、卒業生との交流会には1期～16期生と幅広い年代の卒業生が参加してくれました。卒業生はほぼ全員が進学していて現在省庁に勤務されている方、医師になられた方、日本へ国費留学した方など非常に優秀な方が多くいました。昨年卒業したばかりの16期生たちは実際に活躍している先輩たちの姿に自身の夢や希望を重ねていたことが印象的でした。その卒業生全員からCSAの支援にとっても感謝していると言ってもらいました。その中でも「今の自分はCSAの支援のおかげで勉強することができ、首都ビエンチャンで働くことができるととても感謝している。どうか後輩たちにもこのような経験をさせてあげたいのでCSAの教育支援を継続してほしい」との言葉が印象的でした。CSAが長年にわたって行ってきたサンティパー高校生寮への支援が非常に重要でありラオスの発展を支えていることを実際に感じ取ることができました。

三つ目は現在のタイの勢いを実感したことです。在タイ日本大使館を公式訪問した際に千葉一等書記官から現在のタイは首都バンコクと地方での格差が拡大していることなどいくつかの問題を抱えてはいるが、途上国の中でも上位に位置しており、もう少しで先進国の仲間入りするところまで来ていると説明がありました。バンコクはものすごく発展しており東京と比較しても引けを取らないどころか勝っていると感じました。私のタイのイメージは物価が安い観光地といったイメージでしたが、そのイメージは完全に誤りであったことを痛感しました。マクドナルドのセットはナゲット込みで約2,000円、ユニクロのシャツも軒並み日本より高額でした。タイでのコーディネーターから「タイ人にとって昔の日本は出稼ぎに行ってお金を稼いでくる場所だったが、今は旅行に行く場所だ」とおっしゃっていたことがとても衝撃的で、将来の日本がどうなってしまうのか、世界から取り残されてしまうのではないかと強い危機感を持ちました。



最後になりますが、鈴木団長、森副団長、山崎事務局長をはじめ素晴らしいメンバーとともに無事全工程を終えることができたことに感謝申し上げます。今回のツアーで実際に見・聞き・触れ合うことで体験し学んだこと、CSAの活動が現地でもとても感謝されるとともに期待もされていることを組合員にも伝えていきます。ありがとうございました。

シンフォニアテクノロジー労働組合 伊勢支部 藤原 嵩太



今回このような素晴らしい体験をさせて頂き、CSAの皆様、シンフォニアテクノロジー労働組合の皆様、関係者の皆様にご心より感謝申し上げます。

労組で小学校を作るプロジェクトは知っていましたが、まず私が労組で最初に小学校を見学できるとは思っていませんでした。CSAについては、中古衣類を送る活動を知っていた程度で、活動の詳細は知りませんでした。ラオスも行ったことはなく、見た景色、感じたことを大切にしようと思い、敢えて調べずに出発しました。

特に、印象に残った内容を3点挙げたいと思います。

まずは、サンティパーブ高校卒業生との交流です。ラオ語も挨拶以外分からず不安でしたが、高校卒業生が英語を話せること、スマホのグーグル翻訳で会話をすることができました。卒業生はとても勉強していること、国のために働いていることに感銘を受けました。また、一人ひとりがCSAに感謝の言葉を

伝えていることも印象的でした。会話の中で、私が「ラオスで一番有名な芸能人は誰？」と質問したところ、「テレビを見たことがないので、分からない。」と回答されました。地方によってはテレビを持っていない、電気もない地域もあることを知らず質問してしまい、反省するしかありませんでした。彼らから良い刺激を受けたことがとても思い出として残っています。

次に、ナラオ村小学校への訪問もとても印象深く残っています。高速道路をおりて15分程で到着した小学校の敷地は、想像したよりもとても広大でした。新しい校舎も教室が7教室あり、雨風が凌げる教室であることが確認できました。

小学生の教室に入り、紙飛行機の折り方を伝えました。折れない生徒もいましたが、生徒たちが一斉に紙飛行機を飛ばした光景や純粋に勉強に学んでいる笑顔は、忘れられない思い出の一つです。

最後に、サンティパーブ高校寮の見学です。高校生たちが入口で出迎えてくれました。バーシーセレモニーや踊り等の出し物もあり、CSAの支援、功績がよく分かりました。寮見学を行いました。昼休みにも関わらず、4人部屋で勉強していた生徒に驚きました。高校卒業生と交流した時もそうでしたが、勉強が自分の将来の武器になることをとても理解しているように思えました。

他にも、日本国大使館ではラオスの国や教育、教育の問題点、タイの経済格差や外務省が行う「草の根無償」の取り組みについて説明して頂き、理解をすることができました。

AARやJILAFにも訪問し、各団体の活動を知ることができました。各団体がニーズを捉え、社会問題を解決しようとする姿勢は尊敬しかありません。

教育スポーツ省やルアンパパン県教育スポーツ局でも、教育面での課題をよく理解することができました。ルアンパパン県教育スポーツ局では、問題の深刻さを捉えることができました。生徒だけでなく、家族や教師の問題についても考えさせられました。

このスタディツアーを通じて私ができることは、出来る限りこの経験を労組内で伝えることです。CSAの活動も詳しく知ることができ、ラオスの教育面での問題も目の当たりしてきました。伝えることにより、組合員に少しでも理解してもらえたら良いと考えています。現地に行って行動することはできなくても、募金することで助かることがあります。自分にできることを少しでも行動していこうと思えるスタディツアーでした。

本当に自分の人生の中で良い一週間となりました。本当にありがとうございました。